



Title	桂、修學院兩離宮拝観記
Author(s)	音代, 節雄
Citation	懐徳. 1931, 9, p. 213-216
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88852
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

桂、修學院兩離宮拜觀記

音 代 節 雄

昭和五年十一月卅日小倉理事長以下堂友會員三十有餘名、兩離宮の拜觀を許可せられた。天六新京阪驛午前八時出發九時桂離宮參入。折からの朝霧は桂川の清冽なる流に罩めて模糊たる一帶の風光、向ふ堤の上を歩む人すら、けぶつてゐる。晩秋の桂村には紅葉も殆んど散りつくして、霜をかぶつた大根が處々残つてゐる。離宮は葛野郡桂村字下桂にあつて、東は桂川に境し、西は西山一帯を望み北は遙かに嵐山を見る。暫く休憩の後二組に分れて拜觀する。案内の勞をとられた一人の方は、六代以前から八條宮に仕へてゐられた舊臣で其話し振り頗る洒々磊々

微塵も官僚的色彩がなく、何となく親しみがあ
る。一步御庭に足を入れると、一面の青苔殆ど
地を掩ひ、桂川の水を引きたる池と相俟つて、
幽邃の感縹渺とただよふ。日頃塵の多い商都に
活躍する吾人には、正に近づき難き仙寰である。
とつ宮の山齋シヤの細道おほけなくうま人さびて
歩む今日かな

天正十七年豊臣秀吉八條智仁親王の爲に築い
た別墅が此離宮の前身である。後幕命に依り伏
見奉行小堀遠州畢生の心血を傾注して遂に今の
庭園を爲す。明治十六年九月離宮となつた。こ
の庭園の特徴は何れの眺めも悉く正面より見る

心地して、背面の感なきことである。造園術の巧妙極まれりといふべきである。一隅には深山の如き幽趣あり、また高所には峠の風光あり、桂川の汎濫を豫想して建物すべて高脚を有する古書院、中の書院、御幸殿然り。秋紅葉黄葉の交、峠に龍田屋の暖簾のかゝる風情を聞き及んで、龍田川原の此處に移れりと思ふ池の水を俯瞰して立つ。緑苔の全面に横溢するこの天下の名苑に吾人の歩を印することを得たのは今日の喜びである。其面積修學院の大に比すべくもないが、その成立の古きために、遙に古雅の優れるをおぼゆる。近來新京阪電車の線路敷設により、常時警笛の爲、名苑の閑けさを破られ、鯉魚の夢をさますことが多い。交通機關の進出は雲上にも及ぶ。

桂離宮を辭して、再び新京阪に搭じ嵐山に赴く。河畔の料亭にて中食を喫し、嵐山電車にて四條大宮に出る。途中から曇り勝ちの空は雨となる。中々止みさうな形勢ではない。が時々小降りとなる。四條大宮からタクシーに分乗、出町柳叡山電鐵の終點へ。修學院で下車先年見覺のある道を修學院離宮へ。門前に皆の揃ふのを待つてゐる時又大降りとなる。幸ひ拜觀中は降らず。先年春の拜觀の時とこの秋とは、新緑と紅葉の差でまた趣が異つてゐる。丁度大阪市電の在郷軍人と帝塚山女學校生の團體とが來合はせた。離宮は高野川の東、比叡山の西麓にある。桂離宮の平地に對して、こは山を負ふてゐる。播磨守佐伯公行の創せし修學院、既に廢して村名に残る。修學院の名此に出づ。幕府後

水尾上皇の爲に此離宮を造營す。幕府の政治的束縛至尊の御幸にも及びて、後水尾院の御幸僅かに數度に過ぎなかつた。離宮は上、中、下、三段に分れ、低きより高きに及んで各々御茶屋がある。御茶屋はすべて桂のその如く廣からず城内に林宮寺がありまた、畑を備へ、田夫の作業を見る。新緑、紅葉、雪景共によく、遠望にかなひ、壽月觀、窮邃軒等、簡素なる御建物よく風致に叶ふてゐる。御即位禮に際して、外國使臣等の園遊會を催させられたるとき、林泉の幽趣に驚きの目を睜つたのは彼國の人々であらう。時代により、至尊必ず此處に行幸あるとは限られてゐない。しかるに草莽の臣の身をもてこの離宮の玉砂利を踏む。身もたなしらに羊腸たる小徑を傳ひ、石走る垂水に咽喉のかはきを

止むる身の幸は如何。秋雨時に降り時に止む。懷徳堂の恩恵に浴して浴龍池の紅葉映ゆるをまなかひに見る。嵐山愛宕の諸山秋雨に模糊として浮ぶ。近代式の家屋離宮の外圍にして眼にうつるはすこぶる山齋の清淨をけがすに似る。桂離宮にても然りである。ここは電車から遠ざかつてゐる爲、騒音はないが、高所からの展望は、文化住宅の不調和に著しく害される。先年この歸途に詩仙堂を訪れたことが甦つて來る。雨は少しの間止んでゐる。

離宮を辭し、修學院の電車の驛へと急ぐ時、雨は遂にござや降りとなり全身濡鼠となる。走る。走る。傘のない悲哀。息が切れてしまふ。雨の爲に會員は散々になる。早く歸阪した人あり、おくれし人があり、その行方恰も今日の秋

雨に似てあまいだ。今日の拜觀にお盡力下さつた方々に感謝の忱を捧げ堂の恩頼の深甚なるに悦ぶ。

とつ宮の山より出づる谷水をかはきとごむと
幾掬ひしつ

おほけなく林泉の幽趣まなかひに仰ぎまつり
きとつ宮所

とつ宮の林の中のここかしこ身もたなしらに
玉砂利を踏む
湘園

懷德堂記事

△記念祭典 昭和五年十月五日記念祭恆典を執行し、終つて文學博士鈴木虎雄先生の「呂氏郷約の大要」と題する記念講演あり。

△勅語捧讀式 本年は教育勅語渙發四十周年に

相當するを以て十月三十日授業を休み午後七時より教育勅語捧讀式を行ひ、終つて財津教授小倉理事長の一場の講話あり。

△臨時講演 十一月二十二日文學博士野田義夫先生の「教育勅語と國民道德」と題する講演(本誌に收載す)昭和六年五月二十三日金澤の儒者黒本植先生の國體論及び思想問題に就ての講演あり。

△文科講義時間改正 從來同講義は午後六時より開講せしを昭和六年一月より同七時より九時迄に改む。

△定期講演改稱 毎週土曜日開講の定期講演は同年一月より「土曜講演」と改稱す。

△北宋五子哲學刊行 四月二十五日故本堂教授文學博士松山直藏先生著はす所の「北宋五子哲